

## 鑑賞の授業のための名曲&名盤〈クラシック〉

### ヴェルディ作曲《アイダ》全4巻

スエズ運河開通記念のカイロ歌劇場設立こけら落としのために作曲依頼された《アイダ》によって、ヴェルディの創作活動の後期の幕は切って落とされた。作曲は予定より大幅に遅れ、こけら落としには間に合わなかったが、初演は大成功を収め、以来、ヴェルディのオペラの中でも最もポピュラーな作品となっている。

祝祭用の作品として構想されただけに、バレエのシーンも多く盛り込まれた豪華なグランド・オペラのスタイルで作られているが、その中で、主人公のアイダと敵軍の将ラダメス、そしてそのラダメスを巡る恋敵の女王アムネリスらが織り成す心理ドラマとしての要素も見落とすことはできないだろう。

第2幕第2場の凱旋の場面の華々しさは、《アイダ》の最大の見どころとも思われがちだが、第2幕第1場のアイダとアムネリスとのラダメスを巡っての恋の鞘当ての緊迫感に満ちたやりとり、神殿に生き埋めにされたラダメスが、先に潜んで待っていたアイダと出会うクライマックスなど、見どころは数々ある。ひたすら人間と、人間の心が生み出すドラマをオペラにしてきたヴェルディの作風を考えれば、グランド・オペラとしての豪壮な要素よりも、これらの登場人物があやなす心理ドラマの妙こそが、《アイダ》の真骨頂と言えよう。58歳のヴェルディの芸術性の円熟が、ここには見事に反映されているのだ。鑑賞に当たっては、全体像の把握と、ドラマの本質への理解が重要であろう。

#### ●ムーティ指揮／ニューフィルハーモニー管弦楽団 カバリエ(S) コッソット(Ms) ドミンゴ(T) カップッチリ(Br) ギャウロフ(Bs) [東芝EMI TOCE9131～2 ¥2854]

《アイダ》の持つ豪華さを、万全に描き出した屈指の名盤。先日「イタリア・オペラの殿堂」ミラノ・スカラ座の音楽監督辞意を表明したムーティの若き日の録音は、円熟味こそないが、その覇気に溢れた一気呵成な音楽作りがすばらしい。歌手もドリーム・キャストと呼ぶにふさわしい。女王としての誇りと女性としての心情との狭間で苦悩するアムネリスを圧倒的な声の力で歌い上げるコッソットに、声の絶頂期にあったカバリエのアイダは、がっぷり四つに对峙する。ドミンゴの美しいカンタービレと朗々たる美声によるラダメスも圧巻。

#### ●カラヤン指揮／ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 テバルディ(S) シミオナート(Ms) ベルゴツィ(T) [ユニバーサルミュージック POCL6019～20 ¥3999]

カラヤンの旧録音に当たるこの盤は、何よりも、その壮麗さにおいて傑出している。凱旋の場の豪華さは何度聴いてもため息が出るほどだ。その一方で、このオペラの「心理劇」としての側面においても、カラヤンは万全の配慮を示す精緻な音楽作りを聴かせる。スケール豊かなテバルディのアイダに対して、人間性の奥行きを深さを示すシミオナートのアムネリスも素晴らしい。コッソットとともに、この役柄の永遠のスタンダードと呼ぶべき名唱である。ベルゴツィのラダメスも、格調高い歌唱フォームによって「ヴェルディ歌唱」の範を示している。

# 國土潤一

- カラヤン指揮／ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 フレーニ(S) バルツァ(Ms) カレーラス(T) カップツッチリ(Br) [東芝EMI TOCE11394～5 ¥3000]

カラヤンの再録音で、ザルツブルクでの上演に合わせて収録されたもの。旧録音に比べて、より緻密、繊細で、カラヤンの独自の美学が強く反映されている。暗色系の音作りにより、ゲルマンの色彩とでも呼ぶべき世界が現出している。歌手陣はカラヤン特有の人選で、通常のこれらの役柄を歌う人々よりも軽く抒情的な声が配されている。カレーラスのラダメスは好悪を分けるかもしれないが、フレーニのアイダは、どんなソプラノも達成しなかった入念な性格づけと、確かな発声技術によって、まったく新しいアプローチを生み出している。

- ショルティ指揮／ローマ歌劇場管弦楽団 L.ブライス(S) ゴール(Ms) ヴィッカース(T) メリル(Br) [ユニバーサルミュージック POCL 3923～4 ¥2650]

ミラノ・スカラ座と並ぶイタリア・オペラの聖地であったローマ歌劇場のオーケストラを用いながら、主役陣がすべて非イタリア人というこの録音は、しかし、劇性においても傑出した演奏となっている。ハンガリー出身のショルティのドラマティックでダイナミックな指揮の下、アメリカ人の黒人ソプラノ、レオンタイン・ブライスのアイダ、フランス人のゴールのアムネリス、カナダ人ヴィッカースのラダメス、アメリカ人のメリルのアモナスロという配役は、イタリア人の演奏に遜色ないオペラティックな世界を生み出している。

- レヴァイン指揮／メトロポリタン歌劇場管弦楽団 ミッロ(S) ザーシック(Ms) ドミンゴ(T) ミルンズ(Br) [ユニバーサルミュージック DVD:POBG 1020 ¥7875]

メトロポリタン歌劇場の1989年の上演を収録したもので、フリーゼルの豪華極まりない舞台が映像化されている。メトロポリタン歌劇場の資本力の豊かさをまざまざと示したこの舞台は、《アイダ》の祝典性を前面に押し出している。歌手陣とも「オールスター・キャスト」と呼ぶべき豪華さ。しかし、ライブ収録の辛さで、ラダメス役のドミンゴはおそらく風邪気味なのだろう、万全ではない。当時のこの劇場のスター・プリマであったミッロも、ベスト・フォームではない。レヴァインの指揮も生気溢れるものだが、いささか楽天的にも聞こえる。

- デ・ファブリティース指揮／NHK 交響楽団 サントウニオーネ(S) コッソット(Ms) ベルゴンツィ(T) マストロメイ(Br) [キング DVD:KIBM 1020 ¥3800]

NHKが行なっていた『イタリア歌劇団』公演の映像で、1973年9月NHKで収録されたもの。スクアルツィーナの演出はオーソドックスなものだし、映像もいささか古い。しかし、イタリア・オペラの黄金時代を支えた名匠デ・ファブリティースの指揮は、イタリアのヴェルディ演奏の伝統の重みを感じさせてくれる。全盛期のコッソットのアムネリスの声と演技の素晴らしさと、ベルゴンツィのラダメスのスタイリシティーな歌唱は、貴重な記録である。サントウニオーネのアイダがコッソットのアムネリスに比べると弱いのは残念。